

第一回「大文賞」選考結果について

平成 25 年 8 月 9 日

第一回「大文賞」選考委員会

委員長

三井所清典 芝浦工業大学名誉教授、公益社団法人日本建築士会連合会会長

委員

山岡 義典 市民社会創造ファンド運営委員長、日本NPOセンター顧問

山本 博一 東京大学大学院教授

後藤 治 工学院大学教授

岩瀬 繁 岩瀬建築有限会社代表取締役社長

島崎 英雄 大工棟梁、職藝学院オーバーマイスター

稲葉 實 学校法人富山国際職藝学園理事長

総評

第 1 回の「大文賞」への応募数は、団体部門で 2 点、個人部門で 6 点であった。初めての試みであり、応募が少なかったが、次回は応募が増えることを期待したい。「大文賞」は田中文男棟梁の遺志を受け、若手大工を育成する目的で創設されたものであるが、その主旨にかなった結果になったものと考えている。

選考は、7 月 13 日に行われた。団体部門は提出された調書をもとに選考委員の話合いによって決定した。個人部門は事前に書類選考を行い、最終選考の面接出席者を 3 名に絞り込んだ。書類選考に当り、募集要項に示された要件を満足しているかどうか、大工職能に対する考え方がしっかりしているかどうか、を基準とした。提出される資料は少なかったが、選考委員会で議論を重ねるには十分であった。団体部門では、学校での木造建築教育と企業における大工育成の実績をどのように評価するか、個人部門では、大工には棟梁と職人と経営者タイプがあり、「大文賞」としてふさわしいのはいずれなのか、応募書類からうかがわれる実績や簡易な実技考査についてどのように評価するかなど、選考委員会で熱心な議論が交わされた。面接は共通の質問と簡易な実技考査の 2 本立てで行った。実技考査によって、継手・仕口についての知識や段取り能力などが判断できると考えた。

A. 団体部門

「大文賞」奨励団体 …………… 四日市工業高等学校

団体部門への応募は、1点は四日市工業高校からのもので、日頃から、実習授業で本職の大工を招いての教育を行っているが、木造建築教育のさらなる充実を目的に継手仕口模型を活用するというものであった。もう1点は重川材木店建築部で、企業内での職人養成や社員訓練に模型の活用をするというものであった。重川材木店は、かねてより匠塾という認定職業訓練校を運営していて、大工職人の育成には、高い実績がある。現在は、大工だけでなく、左官工の養成も行っている。模型は、若者の育成だけでなく、一人前の職人のレベルアップにも十分に活用できるとのことであった。社内でレベルの高い大工技術の養成を実践し、すでに「模型」を活用していることは先駆的活動として高く評価できる。

選考は提出された調書をもとに、選考委員の話し合いによって決定した。実績、取組み、副賞となる継手仕口模型の活用についても考慮した。選考に当り、「大文賞」の主旨やねらいは何かということを再度、選考委員会で議論がなされた。田中棟梁が生前、木造建築にかかわる初心者の人々にとって、継手・仕口を勉強し、正確に認識することが必要欠くべからざることと言われていたことから、企業内の訓練も価値あることであるが、今回は学校教育の一環として、大工育成に積極的に取り組むことをより高く評価することになった。ただし、四日市工業高校の使用提案はイベント的なもので、その内容を改め、担当の教員の方には、継手仕口模型の使用を大工に任せるのではなく、自ら使い方を熟知していただく必要があることが指摘され、この模型を通して木造建築の深みを理解して、誇りを持って木造建築教育に活かしてもらいたいという要望が強調された。

B. 個人部門

「大文賞」大工 …………… 佐々岡由訓 君

「大文賞」奨励大工 ……… 高山 智久 君、池田 祐亮 君

最終選考の面接を開始するに当り、面接方法や時間配分等を全員で協議を行った。その方法は、質問については、共通の質問を4～5問行ったうえで、各委員からの質問をするという形式にした。また質疑とは別に、それぞれが持参した日頃使用している道具（かな）を選考委員の島崎英雄棟梁が確認するという事も行った。それに引き続き、簡易な実技考査を行い、その様子を見ることとした。実技考査を通して、段取りのよさや継手仕口の理解度などが見えてくる。時間配分については、3人を個別に面接し、質疑応答に20分、簡易な実技考査に20分程度をあてた。実技による考査では、3名とも大きな差はなく、大工として必要な技量という点で課題があり、特に若い棟梁として具体的に手を動かす前に、じっくりと観察し考えてから取りかかる姿勢が望まれた。

その結果を受けて、最終選考を行った。これまでの経験や保有する技術・技能、将来性、仕事に取組む意欲、道具の扱い、簡易な実技考査における取組みなどのチェック項目をもとに3人の評価を行った。個別の項目ごとでは、それなりに優劣がつけられたものの、トータル的には、ほとんど差がなく、接戦となった。

3人の実績は申し分ないものであり、一人だけの選出は難しい状況であった。3名共に将来性には大きな期待が持てる。このプロジェクトの主旨にある木造建築づくりを支え、未来につなぐ若い担い手とはどのような大工であるべきなのかという根本に立ち返った議論も交わされた。人物やそれぞれの異なる将来性を評価し、3人ともに賞を与えることにした。「大文賞」大工1名、「大文賞」奨励大工を2名とすることとした。優劣がつけにくい状況ではあったが、最終的には、全体的なバランスが取れているということで、「大文賞」大工は佐々岡君に決定した。

◎個別の評価

- ・高山君……大工としての実績は3人の中ではやや見劣りがした。質疑応答では、はきはきと答えていたことには好感が持てた。ただ、さらなる向上心がもとめられ、仕事で使用する木材に対する執念や関心も弱いように感じられた。トラブル対応に対する質疑応答では、評価が高かった。実技考査では、最初に部材を分類するなど段取りを考えていたことと、道具の扱いでは評価が高かった。今後のがんばり次第で、棟梁にふさわしい人材に成長しそうである。

- **佐々岡君**……大工としての経験は3人の中では最も少ない。道具の扱いでの評価は3人の中では最も低かったが、質問に対する受け答えでは自分の考え方や方向性がしっかりしており、どちらかといえば、経営者タイプである。実技考査では、初めて見る継手や仕口に戸惑いを見せながらも何とか形になっていた。向上心もあり、建築についての知識もそれなりに豊富で、棟梁には最も早くなれるのではないか。経験の少なさは、今後の努力やさらなる向上心で補っていけるだろう。新しい取組みとして伝統構法にも挑戦してほしいところである。
- **池田君**……大工としての経験は最も豊富である。まったく違った分野からこの道に入って努力を積み重ねてきたことがうかがえる。建築士や技能士など各種の資格を取得するなど、向上心も高い。質疑に対する応答の様子からも率直な人柄が感じられた。実技考査では、継手仕口を確認し、試行錯誤を重ねながら、取組んでいた。じっくりこつこつと取組む姿から、棟梁として現場を仕切るというよりも、腕の立つ大工職人になるタイプと見受けた。